

2つの版本の『五道踏破旅行記』

崔珠瀚（西江大）

1

李光洙が、『毎日申報』の監事だった中村健太郎から、夏休みを利用して「施政5年の民情視察」のために五道踏破旅行をして欲しくないかと要請されたのは、読者の熱い声援のなかで『無情』の連載を終えた直後か、すくなくとも連載を終えつつあるころだった¹。『無情』の連載が終わるのが6月14日、李光洙が京城を発って五道踏破の途につくのが6月26日であるから、李光洙はもちろん『毎日申報』側にとっても、この企画はかなり急に進められたものだったことになる。

李光洙を特派員とする五道踏破の企画は、6月16日に『毎日申報』の「五道踏破徒歩紀行」で〈出発日と旅程〉は近日中に案内するという予告があったあと、特派員の出発とそれにあつての李光洙の覚悟が掲載される26日出発当日まで、具体的な予定が決まっていない状態だった²。出発から2日後の28日になって、ようやく具体的な旅程が紙面で紹介されたが、それも、当初の計画であった徒歩紀行が汽車と汽船を利用して主要な場所を訪問することに代わったという知らせをともなったものであった³。

五道踏破を通して「新政普及の情勢」を視察し、社会の各方面の発達状況をひろく一般社会に紹介するという企画は、毎日申報社のずっと前からの宿願の事業であったことは、いうまでもな

¹ 「翁に初めて逢った翌年[、]大正六年の夏休みを利用して、始政五年民情視察の朝鮮行脚をして呉れないかと云うことを、当時毎日申報の監事であった中村健太郎氏から、書簡で東京に居る私に云って来られた。その時は、毎日申報に連載した私の小説『無情』を終わり、『開拓者』と云う、第二の小説や、東京雑記と云う紀行、随筆等を連載して居た時である。(李光洙「無佛翁の憶出」『京城日報』1939.3.11/金原模・李京垣編訳『同胞애 告함』、哲学斗 現実社、1997、p.245)。『開拓者』が『毎日申報』に連載されたのはこの年の11月からのことであり、「東京雑信」が連載されたのは、前年1916年9月のことなので、李光洙が中村健太郎の手紙を受け取ったのが『無情』の連載が終わったときだったという言葉も正確なものとはみなしがたい。ただ『無情』に対する読者の熱い呼応は119回(6月3日)から始まる三浪津の大団円で頂点に達したとみられるだけに、—実際『無情』の連載が終了した翌日、『毎日申報』の誌面に掲載された金起澶の感想文「無情122回を読む」(6月15・16日)が二日間にわたって掲載された—

『無情』の人気を実感した毎日申報社が李光洙に五道踏破旅行を提案したことは、早くても『無情』の連載が大団円に向かっていて6月初旬のことではないかと思われる。

² 五道踏破の出発当日である1916年6月26日の『毎日申報』には、李光洙の「途につきて」(1面)、特派員の出発を知らせる「五道踏破旅行特派員出発」(2面)、五道踏破の趣旨を説明して官憲と地方の有志に協力を求める毎日申報社と京城日報社の共同名義の「謹告」(2面)などの記事が載っている。

³ 「五道踏破旅行記途程」『毎日申報』1917.6.28 2面

い。総督府はすでに1915年9月、朝鮮統治5周年を記念して、初政5年の朝鮮の産業の進歩を展示し、植民統治の成果を宣伝するための朝鮮物産共進会を開催していたが、各地方をまわって「施政普及の情勢」を視察し、それを広く紹介するという毎日申報社の五道踏破企画は、朝鮮の産業の進歩を見せつけることで「新政の効果」を知らしめるという、朝鮮物産共進会の趣旨ともぴたり合っていたのである⁴。6月16日付「五道踏破徒歩旅行」にある「今回の好機を得てこれを決行」することになったという言葉でわかるように、読者の熱狂的な好評のなかで『無情』の連載をおえた、あるいは終えつつあった毎日申報社は、いまこそ企画を推進する絶好の機会だと考えたのだろう。特派員が李光洙であること以外の企画は具体的に何も決まっていない状態で五道踏破旅行を知らせる記事を急いで出し、それから旅程を作ったことは、李光洙にかけ毎日申報社の期待がどれほどのものであったかを十分に物語っている。

一方、李光洙にとっても五道踏破旅行はとくに断る理由がない提案であった。すでに1915年11月、李光洙は「新学問の光によって朝鮮思想を研究」することを目的に組織された朝鮮学会の発起人の1人として、朝鮮の現実にもとづいて朝鮮の思想を研究することの必要性を自覚していた⁵、1914年の大陸放浪時代にも、国民会シベリア地方総会の機関紙『大韓人正教報』の編集と執筆にかかわって、海外の韓人社会に植民統治下の本国の悲惨な現実を紹介することに力を注いでいた⁶。さらに李光洙は、新聞という媒体が、その言語的同質性により、物理的に離れている地域社会を一つの民族共同体としてまとめるうえで重要な役割を果たすことをよく知っていただけに、『無情』もまたその作業の一環であったことはもちろんである、朝鮮の各地方をまわって、その見聞を新聞に中継することが朝鮮社会におよぼす影響の大きさをよく認識していたはずである。事実、彼が五道踏破の旅に出るため、東京を発って京城にくる途中で書い

⁴ 毎日申報社の五道踏破の企画と総督府の朝鮮物産共進会の関連性については、정혜영 「五道踏破旅行」과 1910年代朝鮮의 風景 『現代小説研究』40、2009、317-318頁

⁵ 1915年11月、李光洙、申翼熙、張徳秀等の発起で組織された朝鮮研究会は、1916年1月29日に日本朝鮮基督教青年会館で第1回総会を開催したのち、1918年後半、中心人物たちが大挙して上海に亡命する直前まで、たゆまず集まりをもった。李光洙は1916年1月29日の第1回集会和11月3日の集会で2回、農村問題と朝鮮の民族性に関して研究報告をしている。当時、警務局は朝鮮学会について「表面上の目的は韓国に関する一般学術の研究だが、独立運動のための秘密結社」とみなしていた。だが断言はむずかしいが、朝鮮学会は1910年代に在朝日本人たちによって作られ、総督府の支援を受けながら植民統治を支えるために旺盛に活動した朝鮮研究会を意識して、朝鮮人の立場で朝鮮事情を研究することが必要だという自覚から組織されたものと思われる。崔珠瀚 「李光洙民族改造論再考」 『人文論叢』70、ソウル大学人文学研究院、261-263頁

⁶ 崔珠瀚 「李光洙와 <大韓人正教報>9,10,11号에 對하여」 『大東文化研究』2014.6

た紀行文「東京から京城まで」（『青春』9号、1917.7）には、活動し、成長し、繁栄する自然の生命力に対する礼賛とともに、個人と民族の活動もまた当然そのようであってはならないという強い信念、そして「雄壮で永遠の」「新しい国の図案」にかける期待が、ひととき強く現われていることが目につく⁷。もちろん明敏な李光洙が、五道踏破旅行を企画した毎日申報社側の意図に気づかなかつたわけではない。20年余りも前のことなのに、中村健太郎から「始政5年の民情を視察」してくれと要請されたことをはっきりと記憶しているのは、26歳の彼もまた、五道踏破記がどのような条件を満たさねばならないかをよく知っていたという意味でもある。それゆえ、李光洙が毎日申報社の提案を快諾したのは、毎日申報社側の意図に沿いながらも自分の意図を貫徹できるという信念があったからだと見ることができる。

2

毎日申報社の五道踏破の企画についてもう1つ注目すべきことは、李光洙が五道踏破の途につく前日である25日に、「五道踏破紀行」の対象が『毎日申報』の読者のみであるという点が計画変更されたという事実である。すなわち、6月26日の『毎日申報』と『京城日報』の両紙には、この五道踏破企画に関して官憲と地方有志に協力を要請する「謹告」と「社告」が、両社の共同名義で掲載され⁸、6月29日の『毎日申報』に紀行文の第1信が出た翌日の30日からは、『京城日報』にも日本語の紀行文が掲載されたのである。この方針変更は、朝鮮語で書くか日本語で書くかという言語上の問題をこえて、それ以上の問題を内包している点で、特に注目に値する⁹。広く見れば、翻訳をふくむすべてのエクリチュールは、たとえ同一の問題をあつかっても、

⁷ 「東京のなかにいると、春が終わるのやら夏が来るのやら、わからなかったが、外に出てみるともう夏の盛りだった。[中略]すべてが生きているのだ。すべてが成長しているのだ、すべてが活動しているのだ。個人もそうだし、一民族も当然そうであってはならないと強く思う」（全集9、140頁）「いまに雨が降るだろう。気持ちよく、豊かな雨が降るだろう。あの赤く禿げた山がつややかな山林に覆われ、あの干からびた河川も澄んだ水であふれるときが来るだろう。そして美しい花が咲き、清らかな鳥の声が聞こえるときが来るだろう。そうだ。確実に来るはずだ。僕がいまこうして新しい国の図案を描いているではないか。そうだ。だが急ぐことはない。ゆっくりと、ゆっくりと雄壮で永遠のものを描かなくては」（同上144頁）

⁸ 6月26日の毎日申報の「謹告」と『京城日報』の「社告」の存在は、布袋敏博と召在官によって明らかにされた。布袋敏博「二重言語의 李光洙—〈五道踏破旅行記〉論」『韓国現代文学과 日本』、韓国現代文学会第3回全国学術大会発表資料集、2008、9頁／召在官「〈五道踏破旅行〉에 나타난 日製植民地交通体制研究」『語文論集』46、中央語文学会、2011、271頁

⁹ 『京城日報』版の五道踏破紀行文の重要性については、すでに布袋敏博によって何度か提起されているが（布袋敏博「李光洙〈五道踏破旅行記〉小考—朝鮮語版と日本語版の比較研究」、第54回朝鮮学会発表要旨、2003／布袋敏博 前掲発表論集、2008）、資料への接近が難しいためか、これまでこれといった成果が出ていないのが実情である。李光洙『半島江山紀行文集』（永昌書館、1939）序文、全集10、529頁

いかなる媒体といかなる読者層を想定しているかによって、その立場とレベルが違ってこざるをえないからである。じっさい、『京城日報』版の五道踏破旅行記では、『毎日申報』と同一の内容をあつかった場合でも一定の取捨選択がおこなわれているし、『毎日申報』にはない日本人読者のみを対象として書かれた内容もかなりある。

ただ、『京城日報』の日本語の記事については「全州から私は『京城日報』にも紀行文を書けと言われて、そこから木浦に行くまでのあいだは両新聞に書いた」¹⁰という李光洙の回想が残っているので、検討が必要である。かつて『京城日報』の版本に注目した布袋敏博は、全州以前の5回分の記事とそれ以後の日本語の文章のあいだに文体上の違いがないという点をあげ、これは李光洙の記憶違いで、じっさいには最初から『京城日報』に日本語で書いたという見解を示した¹¹。日本語にさほど詳しくない筆者としては、文体上の問題については論ずることは難しいが、①『京城日報』の記事がはじめから「小生」という人称代名詞を使って敬語体候文で書かれている点、②『京城日報』の記事では初回から、『毎日申報』の記事にはない、それも現場にいなければ決して書けないような内容がふくまれている点、③『京城日報』版の第4回にあたる『毎日申報』版の第6信は同じ内容を扱いながらも完全に違う文章で再構成されているという点、④『京城日報』版の第5回は『毎日申報』版の記事とは無関係に書かれたものであるという点を根拠として、李光洙が最初から『京城日報』に日本語で書いたことに同意する立場である。

まず、①の「小生」という一人称代名詞とともに使われている敬語体候文は、以前李光洙が阿部充家にあてた「大邱에서」（『毎日申報』1916.9.22-23）の「小生」という一人称代名詞と、「나이다」の敬語体を思い起こさせる。次に、②『京城日報』の記事にのみ掲載されている内容は、現場で直接見聞きしたものであるうえ、それについての感想、ひいては想像までが入っており、『毎日申報』の記事を土台にして任意で作成できるような性格のものではない。たとえば、次のようなくだりがそうである。

ごじしんたち げいじゅつ ため もう し はた み やはりたびやくしゃ むし き どく
◇御自身達は芸術の為と申すかも知らねども、傍から見れば矢張旅役者にて、寧ろ気の毒なる

かん いたし
感じが致候。

¹⁰李光洙『半島江山紀行文集』（永昌書館、1939）序文、全集10、529頁

¹¹布袋敏博「二重言語の李光洙」9頁

◇木浦及び釜山に於いて各々二日間の興行をなし、来月の初めには東京に帰るゝとのこと

に候。車室の乗降台に堆高く積み重ねたるトランク、カバン、信玄袋類は、問わずして、芸術座

一行の荷物と知られ候。其の中にはカチュシヤの御かづらも御衣装も這入って居るかと思えば、

何となく可笑しくなるを覚え候。(「湖西より(1)」『京城日報』1917.6.30)

◇最後に長官は施政の方針として、啓発主義を執るゝ由に候。朝鮮人は圧え付くるに限る

等、主張する者多けれど、這は決して策の御たるものにあらず、圧えられたる者は、其の圧力

減ずると同時に、旧に復すべければなり、十分利害得失を云い含めて、内心より政府の指導に

従う如くならずが啓発の根本義にして、斯くしてのみ始めて徹底的に朝鮮人を教化し得べし

と語られ、包み隠されざる会心の笑みを漏され候。或は他道より凡てに於いて遅るゝやもしれ

ず、然れども其の結果に於いては、他道に優らんことを確信すと申され、三本目の敷島に火を

点ぜられ候。(「湖西より(2)」『京城日報』1917.7.1)

『毎日申報』の記事を土台にして作成しえない記事であるという点では、④『京城日報』第5回の記事の場合も同じである。「何して今日迄扶余が忘れられたか」という副題のもとで書かれたこの記事は、時間の上でも『毎日申報』の第7信と、第8信にあたる「白馬江上」のあいだに書かれたもので¹²、完全に『京城日報』の日本人読者を対象としてあらたに書いたものである。

さらに李光洙は他の回想で、当時『京城日報』編集長だった松尾茂吉が朝鮮人の手で書かれたという珍しさのためであったろうが、「私の候文体の紀行文」を初号3段の大きな見出しを付けて、2面の上段頭記事として取り扱ってくれたと書いている¹³。2面でなく3面ではあるが、『京城日報』に掲載された五道踏破旅行記のうち、上段頭記事で大きな見出しを付けた記事が登場し始めるのは、扶余で書いた「其の美景、其の感慨」というタイトルの第4、5回が最初である

¹² 『毎日申報』の第7信は、夕陽のころ平済塔、黄昏のころ百済王陵を訪ねた感想を、第8信にあたる『毎日申報』の「白馬江上」はその翌日江景に行く船のうで起きたことを書いたものである。一方、『京城日報』の第5回の終わりには、「此より扁舟に棹して白馬江を下り、江景に出ずべく旅装を整え終りて此の文を草し候」とあり、江景に行く直前に書いたものであることがわかる。

¹³ 李光洙「無佛翁の憶出」前掲書 245-246 頁

¹⁴。以上の事実を考慮すると、京城日報社は最初から李光洙に日本語の記事を任せてよいものか決定できない状態だったが、5回の記事を受け取ってから、李光洙の日本語の能力を信頼して全州付近から両方とも書いてよしと許可した可能性がある。

3

このように李光洙の五道踏破旅行記が想定していた読者層は、そもそも朝鮮人に限定されていなかった。それは最初から違う読者層を想定して、朝鮮語と日本語で同時に書かれたのである。そのうえ、李光洙自身が直接明らかにしているように、木浦で思いがけず伝染病の赤痢にかかって入院したあとは、『毎日申報』記事の一部は友人の沈友燮の翻訳をへて掲載されることになった¹⁵。4編の「다도해」の記事と13編の「徐羅伐에서」がそれである。

沈友燮の翻訳文は、同じ国漢混用文といっても言文一致が定着した李光洙の文章とはちがって懸吐体（漢字語に助詞を付けた文体）に近く、すぐにそれとわかる。「이로다」「이라」のような語末語尾とともに1人称代名詞に「余」、3人称代名詞に「彼」が主に用いられているのも、そのような文体がもつ拘束力のためである。最初に翻訳した4編の「多島海」の記事は難しい漢字でうまった懸吐体で、再翻訳しないと意味が取りづらいところがかかなりある。つぎに翻訳した13編の「徐羅伐에서」の場合は、先に進むにしたがってハングルの統辞構造に近づいているとはいえ、やはり懸吐体の文章がまじっているのが見られる。だが「徐羅伐에서」（4）からあとの文章は意識的に1人称に「나」、3人称に「그」を使って言文一致体に近づいており、翻訳が言文一致体に及ぼす影響力を実感させる。

¹⁴第1回から第3回は1面の5、6段に小さな見出しで掲載されており、さほど目につかない。だが3面に載った第4回は目につくほど大きな見出しで、1段と2段に掲載されており、5回分も3段と4段に配置されている。この大きな見出しは、このあと多島海4編と慶州の13編でふたたび登場する。「木浦で赤痢にかかって苦しんだあとは、木浦・多島海・慶州などの紀行文は『京城日報』に連載する分を私が書き、『毎日申報』は、当時そこにいた友人沈友燮君が翻訳することになった。それで、この部分にはいくらか文体の差があった。」李光洙『半島江山紀行文集』序文、529頁

¹⁵「木浦で赤痢にかかって苦しんだあとは、木浦・多島海・慶州などの紀行文は『京城日報』に連載する分を私が書き、『毎日申報』は、当時そこにいた友人沈友燮君が翻訳することになった。それで、この部分にはいくらか文体の差があった。」李光洙『半島江山紀行文集』序文、529頁

ところで、このような文体の差より重要な問題は、沈友燮の翻訳がしばしば誤訳と意識をともなって、原文の意味を甚だしく歪曲している点である。端的な例としては「徐羅伐에서」(2)の次のようなくだりである。

もと りょう まわ いし そうしよく いま うずも み ただそうだい つちまんじゅう
◇元は 陵の廻りに石の装飾ありしならんも、今や埋れて見えず。只壮大なる土饅頭のみ、
せいがく はいけい たいしやう そうごん かん おこ ぼう だつ はい おうしゃ たい れい おも
西岳の背景と対照して莊嚴の感を起さしめ候。帽を脱して四拝す。王者に対する礼なり。思え
おう あだ しょうせい くだらじん ねんぜん わがそせん かれ にく うら じやう こつずい てつ
ば王は讎なり。小生は百濟人なれば、千二百年前の我祖先は、彼を悪み怨む情、骨髓に徹した
るならん。泗泚城の聖き都を灰燼に付したるは、実に彼の手にて候いき。されども時は万物を
つく どうじ ばんぶつ かい じらい ねん こまじん ちょうせんじん だいかんていこくみん
作り、同時に万物を破壊す。爾来一千有余年、高麗人となり、朝鮮人となり、大韓帝国民とな
り、更に大日本帝国民となる。同じく是れ、白衣の半島人にして、今や当時の恩仇を記憶する
もの 者さえなき[こ]そ可笑しけれ。人事の変遷げに極まりなし。百濟人の後裔たる小生が、一千年後
の今日、武烈王陵の前に四拝するも、考うれば感慨深きものにて候。(「新羅の旧都に遊ぶ」(2),
『京城日報』 1917.8.23)

この引用文は、太宗武烈の陵の前に立った李光洙が、唐の兵を引きいれて百濟を打ち、新羅を全盛期に導いた王の偉業をほめたたえたあと、古代から李光洙の時代にいたる人事の変遷に対しての感想を書きつらねたくだりである。百濟人の後裔である李光洙は、千年あまりのちに、自分が過去の仇敵である新羅の武烈王の陵の前で参拝しているという事実に対して微妙な感慨を表しており、それは、千年以上の歴史をすぎるあいだに過去の百濟人と新羅人が高麗人になり、朝鮮人になり、大韓帝国人になり、そして大日本帝国人になったというのに、当時の恩讐を記憶する者さえないことこそ「흥미롭다(興味深い)」という表現にそのまま圧縮されている。

ところが、このくだりを沈友燮は「同是 白衣의 半島人으로, 今에 當時의 恩仇를 記憶함은 可笑로운 事이다(同じ白衣の半島人として、現在、当時の恩讐を記憶することはつまらないことだ)」¹⁶と翻訳している。原文は「同じく是れ、白衣の半島人にして、今や当時の恩仇を記憶する者さえなきこそ可笑しけれ」であるのに、沈友燮は「可笑しい」という単語を漢字そのまま

¹⁶ 李光洙、沈友燮翻訳

に「可笑롭다 (笑止だ)」と訳したのである。その場合、原文の意味は、歴史上、過去の恩人と仇敵を記憶する必要がないという意味に簡単に歪曲されてしまう。ましてこの文章をすぐ前の文章と結びつけて読めば、すでに大日本帝国民になった以上は、朝鮮人はこれ以上過去のことにこだわる必要はないという、当時の李光洙の政治的な立場とは反する見解となってしまう恐れすらある¹⁷。

さらに、現在の李光洙全集に載っている版本は1939年8月に永昌書館から刊行された『半島江山紀行文集』に載るとき崔貞熙によって文体統一されたうえ¹⁸、内鮮一体をかかげて戦時体制に突入した情勢まで加わって、多くの部分が検閲、削除されているのが目につく。総督府が主導した近代化が招いた日本人と朝鮮人とのあいだの不均等な発展への批判や、朝鮮人の民族的アイデンティティを強調し、独自の活躍を期待するくだりは、当然、すべて削除されている。以下、削除された部分をいくつか示しておく。

席上、第一に驚いたのは、集まった皆さんの人事、言語、凡節が完全に日本化していることだった。着ているものを和服にすれば、誰だって彼らが朝鮮人であるとは気がつかないだろう。もちろん、外見を見て内心まで判断することはできないが、少なくとも外見からは完全に日本化していると言える。私は席上、裡りの朝鮮人も日本人と平行して発展するよう努力してくださいとお願いし、一同はそう努力すると答えた。平行しない発展はどうみても一種病的な発展である。（「裡里에서」(2)『毎日申報』1917.7.14)

木浦府の市街が論達山と瘦せた土地に囲まれているのは地図を見てわかったし、その中の朝鮮人街はちょうど病室の窓からよく見えた。露積岩の角をまわって高楼巨閣のような艦船が軒を並べて出入りする

¹⁷ これと同じような意識がもう一カ所ある。『京城日報』版「多島海巡り」(1)の記事の中で李光洙が李舜臣が経営していた右水營を見て感想をつづった部分で、「されど今や矢叫びも血煙りも立たずして、当時の敵味方は仲よく水營城内に居住せるに思い至れば、轉た感慨なき能わず候」と書いてあるところを、「然하나 今에는 當時의 對敵이 舊怨을 相望하고 親密히 水營城 内에서 兄弟와 如히 居住하는 것은 轉하여 感慨無量하다」(「다도해」(1), 『毎日申報』1917.7.29)と翻訳している。原文が過去とは違って日本と朝鮮との関係に対する微妙な感慨を含んでいるのに対し、沈友燮の翻訳は「過去の怨恨は忘れあい」「兄弟のように」原文にない文言まで挿入して日鮮同化政策に積極的に同調する語幹を漂わせている。

¹⁸ 李光洙「無佛翁の憶出」前掲書 245-246 頁

「それを、このたび出版するにさいし、私が病中にあるため、友人である崔貞熙女史が修正して、私の文体に近くなるよう文体統一をしてくれた」 李光洙『半島江山紀行文集』序文、前掲書 529 頁

ところが館と呼ばれる内地人の市街である。朝鮮人だから住むなという法はないはずだが、繁華なその市街では朝鮮人は商工業を営むだけの実力がないと、来訪した木浦人が語っている。（「木浦에서」『毎日申報』 1917. 7. 27）

市区は改正され、新聞があり、銀行があり、電話があり、電燈があり、水道も遠からず完成するというから、これで都会の形は完成した。ただ、あの無職の人民をどうするのか、飢餓に苦しむ人民をどうするのか、教育を受けられない児童たちをどうするのか。そして金庫のなかで腐っていく金をどうするのか。（「光州에서」(1)『毎日申報』 1917. 7. 24）

歴史のすべての記録が消滅してしまっても平済塔が巖然と百済の旧都に立っている間は、我が民族の精神の崇高で浩鍊であることは忘れられることはないだろう。いま、血管のなかにこの祖先の血が数滴流れているのだから、新たな沃土に逢い、新たな日光を受ければ、きっと燦然として花を咲かす日があると信じる。（「第7信—白馬江上에서」 1917. 7. 5）

これらの部分は、少なくとも1917年の「五道踏破旅行」が、「始政5年の民情視察談」という官製紀行文という基本的な性格をもちながらも、朝鮮人の民族的アイデンティティを強調したり、日本人中心の総督府の施政に対する批判的な視線をもつことが、ある程度、許されていたことを語っている。しかし、1939年の永昌書館本はこのような部分がすべて削除されており、それこそ官製紀行文の性格に近づいてしまった。とくに、3番目の引用文の場合、ゴシックフォントで示した部分だけが削除されているが、この部分を削除すれば、総督府の施政が実際には朝鮮人たちに影響を与えることができないでいるという現実への批判が、総督府の施政をほめたたえる文章へと変わってしまうのである。

以上で、1917年頃の李光洙の完全な理解のためには、『毎日申報』版の「五道踏破旅行」とあわせて、『京城日報』版の「五道踏破記」を比較検討する作業がまずなされねばならぬ理由がある程度明らかになったと思う。ただ、本稿は資料の紹介に目的があるため、まずは『近代書誌』の誌面を借りて『毎日申報』と『京城日報』版の五道踏破紀行文の原文と翻訳文を紹介しておくにとどめ、より深い論議は後続の論文でおこなうことにする。